

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月5日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530566

研究課題名（和文） ダルクにおける薬物依存からの『回復』経験のエスノグラフィ

研究課題名（英文） An Ethnography of "Recovery" Experiences from Drug Addiction at DARC

研究代表者

南 保輔（MINAMI YASUSUKE）

成城大学・文芸学部・教授

研究者番号：10266207

研究成果の概要（和文）：薬物依存からの「回復」経験を明らかにするため、大都市圏に位置する2つのダルクのフィールド調査を行うとともに、利用者とスタッフにインタビュー調査を実施した。その結果、（1）「回復」のプロセスが多様なものであること、（2）薬物の再使用が「回復」において大きなはたらきをしていること、（3）携帯電話が薬物使用と「回復」において果たす役割、（4）草創期ダルクにおける「回復」観と「支援」観、とが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：Outline of Study Results: The Drug Addiction Rehabilitation Center (DARC) is a Japanese organization that was established to support recovering drug addicts. The DARC operates halfway houses in about 60 cities in Japan. In order to investigate the common features and variations of the "recovery" process experienced by drug addicts, 15 recovering addicts who were attending 'meetings' at X and Y DARCs, located in major urban areas, were interviewed. Major findings are that: (1) the "recovery" process varies from one addict to another, (2) a relapse or use of illegal drugs provides valuable lessons and opportunities for reflection which may enhance "recovery," and (3) cell phones play key roles in both obtaining illegal drugs and staying sober. Also, a study of documents describing the first DARC, which was established in 1985, was conducted. It was found that (4) the first DARC introduced quite different and new models of "recovery" and "support." Drug addicts needed the secure and safe place provided by the first DARC where they could continue attending meetings.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2012年度	1,300,000	390,000	1,690,000
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：社会化, 変容, セルフヘルプグループ, パネルインタビュー, 参与観察

1. 研究開始当初の背景

薬物依存症者の「回復」について、医療や福祉の立場からの研究はあるものの、社会学の立場からのものはほとんど見られなかった。依存症者についての社会科学的な研究とし

ては、アルコール依存に関するものが中心であった。

ダルクは、1985年に最初の施設が創設された薬物依存からの自立的回復組織である。2009年には全国に68施設あり、445人が利

用していた。ダルクについては、創設者である近藤恒夫の著書などがあり、創設時の経緯などの概要は知られていたものの、利用者のライフストーリーや「回復」実践、就労状況などの現状については情報がなかった。

2. 研究の目的

薬物依存からの自助的回復組織であるダルクのエスノグラフィ研究を行うこととした。具体的には、ダルクに協力を得て、(1)この組織の全体像の学術的理解をめざし、(2)薬物依存者への継続的なパネル式インタビューを実施し、薬物依存からの「回復」経験の包括的な記述をおこなうとともに、(3)個々人の「回復」の個別性とダイナミズム、およびそれがダルクや地域社会全体の「回復」像とどのように関係しているのかについて理解することを目指した。

3. 研究の方法

大都市圏に位置するXダルクとYダルクを定期的に訪問し、利用者のインタビューを実施するとともに、ミーティングなどの活動を観察調査した。2011年4月から2013年3月にかけて、調査チームのメンバー（研究代表者と分担者を含めた総勢7人）は、訪問日数合計でXダルクに65日、Yダルクに16日の訪問調査を行った。また、利用者スタッフに対して合計で117回にのぼるインタビューを実施した。

インタビューはICレコーダで録音し、文字起こしをして基本データとした。ミーティングなどのダルクでの活動は手書きメモを用いた観察とし、これをもとに「フィールドノート」を書き上げてデータとした。さらに、ある利用者からは日記の提供を受けることができた。

ミーティングのほかに、特別な行事である野外レクリエーションやボランティア活動なども観察した。XダルクとYダルクとの比較資料とするために、他地区にあるZダルクとWダルクを2012年2月に訪問し、観察とスタッフインタビューを実施した。また、ダルク退寮者を対象とする自立支援組織の訪問も行った。

4. 研究成果

(1) 依存・「回復」過程の多様性

インタビュー調査協力者の一覧を表1に示す。

15人の(元)利用者は、男性で、薬物依存で苦しんだという点では共通していたが、そのほかの点では多様な「回復」過程を歩んでいた。依存の状況、ダルクにつながる経緯、ダルクにつながってからと大きく分けて整理する。

① 依存の状況

依存対象は覚せい剤が10人といちばん多いが、咳止め薬やアルコール、ギャンブルと分かれる。最初はシンナーや大麻(マリファナ)だったのが、覚せい剤に変わったというひとも見られる。最初に依存薬物を使った年齢も10代半ばから30代前半までとさまざまである。インタビュー調査協力を得ることはできなかったが、50歳をすぎて女性との関係から覚せい剤依存となったという利用者もいた。

表1 インタビュー調査協力者一覧

仮名	依存物質	インタビュー開始時点の状況	インタビュー開始時期・回数
Aさん	覚せい剤・咳止め薬	Xダルク 入寮中	2011年5月～計13回
Bさん	覚せい剤	Xダルク 通所	2011年5月～計12回
Cさん	覚せい剤	Xダルク 入寮中	2011年5月～計8回
Dさん	アルコール・ギャンブル	Xダルク 入寮中	2011年5月～計3回
Eさん	覚せい剤	Xダルク 入寮中	2011年5月～計11回
Fさん	アルコール・咳止め薬	Yダルク 入寮中	2011年5月～計10回
Gさん	覚せい剤・アルコール	Yダルク 入寮中	2011年5月～計13回
Hさん	覚せい剤	Yダルク 入寮中	2011年8月～計10回
Iさん	咳止め薬・頭痛薬	Yダルク 入寮中	2011年9月～計8回
Jさん	覚せい剤	Yダルク 入寮中	2012年1月～計6回
Kさん	咳止め薬	Xダルク 退寮	2012年2月～計1回
Lさん	覚せい剤	Yダルク 入寮中	2012年3月～計1回
Mさん	覚せい剤	Yダルク 入寮中	2012年3月～計1回
Nさん	覚せい剤	Xダルク 通所	2012年3月～計1回
Oさん	咳止め薬	Xダルク スタッフ研修	2012年2月～計1回

② ダルクにつながる経緯

15人の利用者は刑務所経験があるひとが大多数で、出所後行くところがなくてダルクに来たというケースが多い。最初は家族が身元引受人になってくれても、何度も服役を繰り返すうちに愛想を尽かされてしまう。20年あまりのあいだに10回以上服役した人もいるが、その間に親も高齢となり身元引受もできなくなってしまう。かつては、親に寮費を出してもらってダルクに入寮している利用者もいたが、いまでは生活保護を受けながらの利用がほとんどである。

③ ダルクにつながってから

インタビュー調査を始めた時点での調査協力者たちのダルク利用期間は、1ヶ月から約20年とさまざまであった。あるケースでは、利用前の相談時の体験ミーティングに居合わせたということもあった。ダルクにつながった回数も、調査時期のダルク利用が初回というひとが多かった一方、初ダルクから約20年、利用したダルクが8か所を数えるという利用者もいた。

(2) スリップ(再使用)の重要性

薬物依存からの「回復」では、薬物使用をやめ続けることが唯一の最終目標である。アルコールも含めて薬物を使わない状態を「クリーン」と呼んで、クリーンが続くことが目標とされる。だが、断薬を決意してダルクにつながったからといって、その後すぐにクリーンが続くというわけではない。スリップ(覚せい剤依存の場合は「リラプス(再発)」

と言われることもある)を繰り返しながら、クリーン期間が延びていくというケースが見られた。

1人の利用者の事例を取り上げる。ここでは、表1とは別にQさんとしておく。個人の特定を困難にするためである。

①Qさんの「3回」のスリップ

ダルクにつながってから3年のあいだにQさんは3回スリップしている。最初は、刑務所から仮釈放され刑期満了となつてすぐのことだった。同じダルク利用者から誘われていっしょに使った。2回目は施設で知り合った女性といっしょだった。この女性とは数ヶ月のあいだに何回かいっしょに使った。3回目は、アパートに押しかけてきた知人の使用に巻き込まれてのことだった。

Qさんは、スリップのたびに深く反省し後悔している。1回目のスリップでは、警察に捕まって服役となる恐れにおののいた。刑務所経験が自分にとってそれほどまでに辛いものだったと改めて思い知ることになった。少しずつ貯めていた貯金も使い果たしてしまった。

ダルクとNA(ナルコティクスアノニマス)のプログラムでは、正直になるということがなによりも強調される。スリップしたことをミーティングで話すのがなによりも大切だ。Qさんも最初のスリップ後、ミーティングで告白するまで2ヶ月以上かかったが、その後は1週間ほどで話すことができるようになっていった。また、同じパターンでのスリップを繰り返すことはなかった。

②ミーティングと12ステップ

ダルクにつながってしばらく、利用者は、午前と午後はダルクで、夜はNA会場でミーティングという、1日3回のミーティングに出席する生活を送る。NAミーティングの特徴は「言いつばなし聞きつばなし」であり、なにを話してもかまわない。薬物を使いたくなかったことや使ってしまったことは、正直に話すのが「回復」にとって最重要とされている。

ダルク利用者は、利用歴の長い先輩(「先行く仲間」と呼ばれる)の体験談を聞いて、自身の「回復」生活の参考とする。一方、自身の経験について話すことは最初のうちはなかなかできない。Qさんの場合、ダルクにつながって1年をすぎたころからすこずつ話すことができるようになっていった。NAのミーティングについても、「好きな会場」を持ったり「良いミーティング」を感じたりできるようになっていった。12ステップや「今日一日」薬物を使わないでしようという教えの理解も次第に進み、欲求が強まったときにもこういった教えを使って使用回避ができるようになっていった。

③教えの効果を感じる時

Qさんの場合、覚せい剤への欲求はダルクにつながりながら「回復」生活を送るうちにしだいに弱いものとなつてきた。欲求が生じる間隔が長くなり、生じたときの継続時間も短くなった。

特筆すべきは、あるNA会場に到着したとたん欲求が消失したという経験である。類似の経験が2度あり、Qさんはこれを「ハイパーパワー」のおかげと考えるようになった。それまでは、ミーティングに出席するだけでは覚せい剤をやめることはできないと考えていたが、このような経験を経てNAやダルクの教えを信じるようになった。

④「回復」の多様性とスリップ

Qさんの事例を紹介した。スリップのたびに失敗したと反省し、回避策を工夫する。薬物の再使用は回避すべき対象であると同時に、それから学ぶべき失敗経験である。Qさんのように同じ失敗を繰り返さないでクリーン期間を延ばしたひとがいる一方で、同じスリップを繰り返して服役となってしまう利用者もいた。「回復」の多様性は、スリップ経験の多様性にも見られた。

(3)「回復」と携帯電話

「回復」とスリップの多様性が明らかとなる一方、携帯電話の果たす役割も興味深いものであった。①覚せい剤の入手を可能とするものであり、それがために、②悪い誘いの手段として統制されていた。また、携帯電話機のみならず、③電話番号も統制の対象となっていた。

①覚せい剤へのアクセスとしての携帯電話

一般人の所持が禁止されている覚せい剤は、その入手経路も謎である。Rさんのスリップ経験は、この謎を解き明かす事例となった。ダルク入寮者は携帯電話の所持が禁止されている。Rさんは仕事を始めて、携帯電話の所持を許された。

Rさんは、仕事を始めて3回目の給料日にスリップしてしまう。もらった給料をすべて覚せい剤使用のために使い果たして、ようやくダルクに帰ってきた。このとき、覚せい剤の密売人と連絡を取ったのはスマートフォンを使ってのことだった。検索機能で連絡先を見つけて連絡を取った。

実際に購入する1ヶ月まえにも、密売人の連絡先を、同じく検索機能を使って見つけていた。そのことをミーティングで話していれば、使用につながることはなかったであろうとの指摘を受けていた。

②携帯電話所持の統制

ダルク入寮者は携帯電話の所持が禁止されている。通所利用者であるSさんも、携帯電話を解約した経験がある。覚せい剤をいっしょに使おうと誘ってくる知人との連絡を絶つためである。逆に、覚せい剤使用をやめ

させるために、ある知人を説得するためだけに携帯電話を契約した経験もSさんにはある。

このように、覚せい剤の密売人、あるいは、いっしょに覚せい剤を使う知人との連絡手段として携帯電話が使われている。所持している本人のみが通話に出るという携帯電話の特徴が活用されている。

③電話番号の統制

Tさんにとっては、2人の電話番号を捨てることのできるかどうか「回復」プロセスの重要なステップとなった。1人は覚せい剤密売人、1人は覚せい剤使用仲間の知人である。ダルクの入寮者から密売人の電話番号を教えてくださいとせがまれたTさんは、教えてしまう。教えられた入寮者は、その密売人に連絡を取ってスリップしてしまう。仲間の安全を脅かす行為であり、Tさんはダルクスタッフから厳しい注意を受けることになった。

知人とは、いっしょに覚せい剤を使っていた。Tさんはそのような生活から抜け出したいとダルクに入寮した。だが、入寮生活がいやになったときにはこの知人宅に再度こもりこもると「お守り」のように番号を持っていた。これらの電話番号を書いたメモを捨て去ることで、Tさんはダルクで暮らしていく決意を固めた。

このように、「回復」とスリップの多様性のなかで、携帯電話とその番号は、鍵となる局面で重要な使われ方がされていた。

(4) 草創期ダルクにおける「回復」と「支援」

インタビューと観察調査に基づく研究に加えて、過去のダルク活動についての歴史分析も行った。

薬物依存症者であり、アルコール依存者のための施設であるマック(MAC, メリノールアルコールセンター; アルコール依存者のための、AAの12ステップに基づきリハビリテーション施設)のスタッフであった近藤恒夫により、1985年にダルクの最初の施設が東京に開設された。

①草創期ダルクにおける「回復」

草創期ダルクにおける「依存」からの「回復」は、医師等の専門家の監督下で病気を治し現状へと復帰するという意味での回復ではなく、ときに再使用を繰り返すなかで自ら「依存」であることを認める自由を行使し、自らとの関係において平等な他の「依存」者との共同生活を通して、「依存」という病気とつきあい続ける、すなわちクスリをやめ続けるような「回復」であった。

②ミーティングにおける「承認」

NAスタイルの、「言いつばなし聞きつばなし」のミーティングがほぼ唯一のプログラムであるダルクが、依存者の「回復」をどの

ように促進しているのか、まだまだ謎の部分が多い。だが、初期の資料の分析からは、ミーティングにおいて「承認」を与えられた利用者は「回復」できると見なされていた。

ミーティングは、「自分とは違う」という異質性と「自分も同じだ」という同質性をともに感受しながら、語りのデータベースの中に、完全に重なることなく、自分を位置づけていく実践を可能にする空間として理解されていた。

③「承認」を下支えする「保障」

以上のように、ダルクは薬物依存者が「承認」されつつ「回復」への途を歩むことのできる安全な空間でなければならないと近藤たちは考えた。メンバー全員が日々の生活を送りながらミーティングに出続けることができなければならないのだ。

基本的なセキュリティとしての「保障」がそのためにも必要と考えられた。近藤たちは、地域や宗教団体からの寄付でなんとかダルクという組織を維持した。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計1件)

- ① 南 保輔, 居場所づくりと携帯電話: 薬物依存からの「回復」経験の諸相, 成城文藝第221号 p. 158-135 (縦書誌のため), 2012, 査読無.

[学会発表](計2件)

- ① 南 保輔, スリップサイクルの進化を通じての「回復」: ダルクにおける「回復」の社会的検討(5), 日本社会学会第85回大会, 北海道, 2012年11月.
- ② 平井 秀幸, 草創期ダルクとはいかなる場だったのか: ダルクにおける「回復」の社会的検討(1), 日本社会学会第85回大会, 北海道, 2012年11月.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

南 保輔 (MINAMI YASUSUKE)
成城大学・文芸学部・教授
研究者番号: 10266207

(2) 研究分担者

平井 秀幸 (HIRAI HIDEYUKI)
四天王寺大学・人文社会学部・講師
研究者番号: 00611360

(3) 連携研究者

なし